

地球の木

♥ 地球上のすべての人たちと共に生きたい

特集 支援地訪問



ラオス現地訪問

12月13~19日

都市の変化に目を見張る

このところのラオスの経済成長率は7%を超え、経済発展を続いているといわれている。ドルやタイバーツが幅を利かせていました以前に比べると、ラオスキップが強くなり、物価も高くなっている。街並みもきれいになり、行きかう車も新しく立派で、街を走り回る、あの愛すべきトウクトゥクの姿も以前ほど見かけない。ラオス進出の日本企業は既に100社を超えており、サフナケートの経済特区でも、ニコン、トヨタ紡織、アデランス他いくつか工場が稼働している。リスク回避でタイ・カンボジアからの工場移転も聞く。サフナケートで立ち寄った村でも、カラフルな波型スレート風の屋根を乗せた、高床式の新築が何軒も見受けられた。車を持つ家も出てきているし、村の中にもガソリンと軽油を売る店が出現していた。豊かな世帯が生まれているということなのだろうか。

しかしながら、今回初めて訪れた村、ラワイ村は美しい森に囲まれ、変化の波というより相変わらず穏やかであたりまえの日々のくらしが、続いているように思われた。



ビエンチャンの目抜き通り

CONTENTS

- 特集 支援地訪問 ラオス 1~3
- 特集 支援地訪問 ネパール 3~5
- 特集 支援地訪問 カンボジア 6
- 地球の木と私 6
- 気仙沼だより その16 7
- ラオス・ネパール合同報告会 7
- 活動日誌(12月~2月抜粋) 7
- 総会のお知らせ 8
- 報告 年末募金／地球の木カレンダー2017 8
- イベント情報 8

地球の木の3つの海外プログラムの現地訪問調査が昨年の10月、12月に次々と行われました。現地の人たちと接するこの機会は、支援の成果を実際に確認したり、うまくいっていない問題点を見出したり、またプログラムをこれからどのようにするか考える貴重なものです。以下はラオス、ネパール、カンボジア訪問の報告です。

ラワイ村での「魚保護地区」と 「ジェンダー研修」

ラワイ村の人々に集まつてもらい、なぜこの村に魚保護地区を設置したのかと尋ねたところ、乱獲により魚が減っているという認識を村で持つてあり、将来世代のためにも魚資源を保全しようと全員一致で決まったという。昨年4月頃からJVCスタッフと共に何度も話し合って、禁漁とする場所を選定し、使用ルールや罰則を決めてそれを記した看板を立てた。そしてJVC、村人、行政官も招いて設置式を行なって、公的に認められた。

もともと川に行く用が多い女性たちに協力してもらい、パトロールの役割も果たしてもらっている。そのためか今までに違反者は出ていない。そして話し合いが始まった昨年4月ごろから禁漁にしているので、すでに魚が増えているそうだ。

また、ジェンダー研修で学んだことについて話が及ぶと、「性別、出身民族にかかわらず、人間として皆平等である。女性の仕事とされている水汲みも料理も一緒にやっていくべきだと学んだ」と男性の一人がとうとうと話し始めた。よく分かっていると言いたげだ。しかし女性側に「どこか変わってきましたか?」と尋ねても「そうねえ…」とか「子どもの面倒をみてくれるかな…少しあは家事を手伝ってくれるようになったかなあ…」と。知識が意識を変え、さらに行動となるには、どこでも時間がかかる。ラオスの村では水運び、精米、機織り、森での採集といった仕事は女性と子どもたち。私たちの訪問がいつも農閑期のせいもあってか、働いている姿は主に女性ばかりで、男性はというと、森の奥の方へ狩りに行くこともあるし、家の修理とか力仕事と聞くのだが、働く姿をあまり見かけない。今回は男性陣が竹を裂き、鳥かごを編んでいる光景を見た。聞いてみるとこれは農閑期の男性の仕事で女性はやらないという話だった。今後はこういった固定観念からどのように変わっていくのが興味深い。JVCによると、今回活動にジェンダー研修を加えたことで、男女同権や話し合いの重要性、協力などを学んだ。社会主義の国では、真正面から触れにくい少数民族の人権、差別な

どの問題にも今後ジェンダーを取り入れやすくなるのではないかと考えている。

ファイサイ村での 「意識啓発ドラマ」

「意識啓発ドラマ」は、増大する契約栽培などで村人が被害にあわないように、人形劇やDVD化したドラマを見て、法律や権利を知り、騙されないための予防策などを学ぶ。例えば、トウモロコシの契約栽培のうまい話に乗せられて、期待したほど収益が上がらず借金だけ残ったなどの事例を、少数民族の学生が彼らの言語でドラマ仕立てで演じてくれる。またはDVDで見る。実際に被害にあった村人もいるので、皆関心が高い。騙されないためには、一人で決めずに夫婦、村長など複数の人に相談すること、よく理解してから契約することなどが重要と学んだと村長さんが言っていた。「もっと早く見ていたら」という声もあがつたようだ。

こういった各村での多岐にわたる活動もJVCが引いた後も継続して行われるよう、郡に今までの各村での実施内容を文書で残し、今後もフォローしてもらうよう引継いだ。撤退にあたっても、郡の役人も引き込んでの体制づくりも評価すべき点と思われる。

ついに、 より深化した活動をめざして

JVC現地代表の平野さんに今後の展望について話してもらった。このたびこの第2期事業を終了し、ラオス政府との契約を更新して第3期にのぞむ。現在候補の村を選定しているところだが、地域を変え、対象村を減らしてより深化させていく予定だそうだ。

JVCの活動目標は、村人の安定的な食糧確保能力を守ることである。しかし農業も放牧も豊かな森林があるからこそできること。引き続き農業技術支援と共に、森林保全分野での活動を深めていきたいとのことであった。それは、新たな地域でも外国企業の進出によって起ころる土地・森林問題に対して、村人の土地利用の権利を守る、村人の側に立った活動となる。難しい状況もあるだろうが、粘り強く進めていってほしい。また、新しい試みとして、村の歴史や生活データをもとにまとめた村の百科事典(?)を作成する計画もあるようだ。自分たちの村を見直して愛着や誇りにつながる試みと思われ、大いに期待したいと思う。

平野さんから地球の木に対して、「JVCはラオスの現場でプロジェクトを実施し、地球の木は日本国内で広く皆さんに伝える役割を持ち、互いに補完し合う仲間と思っている」と言われた。私たちもラオスプログラムの新しいステップを共に歩んでいきたいと思った。(ラオスチーム 中野 真理子)



村での話し合いの進行役はスタッフのホンケオさん

「食用コオロギ」の飼育？

初めてラオスを訪問した。以前から友人たちと「まつたり、ゆったり」とラオスを旅したいと話していたが、地球の木支援地の様子を見るという役目をもっての旅となつた。

首都ビエンチャンはフランス文化の面影を残し、人も車も少なく、緊張感なく道路を渡れる。家も車も新しい。これは、ほかの近隣諸国より遅れて開発の波が訪れたため、新しいのだそうだ。以前行ったことのあるタイ、カンボジア、ベトナムの首都で感じた、若者のエネルギー、また車やバイクの渋滞など町の喧騒からは遠い世界があった。平野さんは、「人口圧力がないから」と言われた（人口が少ない）。ちなみにベトナム9000万人、タイ6800万人、カンボジア1500万人、ラオス640万人。

食事は、主に麺類やもち米にいろいろな野菜と鶏肉が多い。おいしいのだが鶏や虫の類がダメな私は、毎回野菜スープとご飯。平野さんはなんと食用コオロギの飼育をしているとか。現地スタッフに飼育方法を教わったのだそうだ。

JVC活動地の村を訪問。未



舗装の悪路が続き、でこぼこがひどく通れない所は、スコップで道を作つて何とか通る生活力に脱帽。天までも届きそうな熱帯の森。森は鬱蒼とせず明るく、さわさわと風に葉が揺れ、立つてるとその中に包み込まれ地球と一緒に化したよう。訪れた村々では、人・鶏・ヤギ・水牛・犬が一体となり、森の恵み、川の恵み、身近な動物の恵みと死と共に、全てが自然のサイクルの中で生活していた。乳幼児の死亡率も高いこの地域で目をキラキラ輝かせた裸足の子どもたちが、どうか健やかに育つてほしいとカメラのシャッターを押しながら願つた。

(理事 成瀬 悅子)



巻きスカートの子どもたち



ネパール現地訪問

12月2~14日

—10年目の「幸せ分かち合い」— マンガルタール村

今後の計画を話し合う会場は、地域の拠点となっている学校。集会に行くと、この10年間に実施したプログラムに参加した人たちが声をかけてくれる。地元の小学校の先生になった元奨学生ジヤナクマヤさんは以前給料をサポートしていくこともある。赤ちゃんをおんぶして教えていた先生だ。「8月から政府公認の教師になりました！」と満面の笑顔。同じく元奨学生のエソダさんは、地元の大学を卒業し、NGOの短期雇用スタッフとして地元で働いていた。また、収入創出プログラム1年目に参加したクマリさんは「今年からうちの娘が奨学金をもらうことになったよ」と嬉しそう。大工のトレーニングを受けたビシュヌさんは「今は友達と一緒に隣村で住宅建設の仕事をしています」と報告。シェルターの支援を受けた第1区の3人も集会に参加していた。住み心地を尋ねたところ、「寒いけど、安心です」と返事が返ってきた。「幸せ分かち合い」を実感した今回の訪問であった。

この集会に先立ち、準備が周到に進められていた。10月に大学院生のシムリンさんを中心に行なった。家族構成、教育、保健衛生、経済状況、社会活動など7分野にわたり、100項目ある詳細なものだ。SAGUNが、集まったデータを分析し、課題を抽出し、村人たちと共有した。支援が始まった2007年にも若者たちと同様の調査を行なっている。その時の結果と比べてみよう。

この10年で村はどう変わったか？

人口は微増だが、世帯数は100増えている。その理由は、復興支援金が世帯単位に下りたことが影響している。新しい傾向としては、村に家があるものの、65世帯が実際には村の外に住んでいること。以前はトイレがない家が多かったが、現在は80%に普及。電気やバイオガスも増えている。経済状況はどうだろう？1年分の食糧が自給でき、余剰もある世帯が18%から71%に増えている。しかし、未だに飲み水や灌漑用水が得られず、水

汲みが重労働になっている地域もあった。

村を知り、村人が決める

3ヵ所での地区集会には合計260人が集まつた。グループ別の話し合いは熱が入る。若い女性たちのグループは、非識字の問題を取り上げていた。参加者がその原因を挙げていく。男女差別、学校が遠い、貧しい、友だちも学校に行っていないなど。非識字者になるとその結果は？自分の子どもたちに勉強を教えられない、バスに乗れない、携帯を使えない、良い仕事につけない、疎外感がある。教育を受けた息子が町で字の読めない母親を恥ずかしく思い他人として扱った例が挙がつた。

では、どうしたら良いでしようと進行役のカマルさんが尋ねる。出た意見は、親が教育を受けると良い。子どもにも教育を受けさせようになる。村のみんなで手伝う。村にも教師はいる。外部からトレーニングや本、文具の寄付を提供してもらおう。奨学金を作ろう。対象は貧しい家族。助けてくれる団体はたくさんある。ユースクラブを作ろう。演劇で教育の重要さを伝えよう。学校をやめた子どもの家にグループで説得に行こうなど、積極的な意見が次々と挙がつた。

村が大きく改善されたのは、もちろん様々な団体が関わっており、地球の木の低予算だけでできた訳ではない。しかし、このように多くの人が集まり、村の実態を把握し、自分たちで必要なものを考えていくやり方は定着してきたと言えるだろう。特に若い世代に希望を与えていたと感じた。

各地区で出た意見から今後具体的な活動計画を作っていく。



ウッタラさんの仮設シェルター

しかし、周辺の村で大きな資金を使ったプロジェクトが進行していることが難しい状況を作り出している。「幸せ分かち合い」という「お金第一主義でない試み」はどれだけ人々に浸透していくのだろうか。集会でのエピソードを紹介しよう。ある男性が「予算はあるのか」と質問した。カマルさんは答えた。「開発には2つの方法があります。お金が先にあってそれを使うためにプロジェクトをつくる方法と、みんなで課題を見つけ解決する方法。皆さんはどうぞどちらがいいですか」。全員が後者を選んだ。

—大地震からの復興 仮設シェルターの生活は厳しいが…

初めて訪れたコカム地区。地震被害が大きいとされ、地球の木は第2次支援事業として同地区75世帯のうち、50世帯を対象にしたトタン板の費用を請け負っている。私たちを老若男女の数十人が笑顔で出迎えてくれた。聞き取り調査では、被災当時の様子や現在の過ごし方について輪になって口々に話してくれた。その合間にたき火で温めたミルクティーをふるまってくれるなど、厳しい生活にもめげずに頑張っている「たおやかさ」が窺えた。

ウッタラさん(70)もその一人。木と竹で編み、トタン葺き屋根の仮設シェルター約23平方メートルに、妻(60)と孫の7人と一緒に住む。ウッタラさんは、「壊れた家には今も怖くて住めない。簡素な仮設シェルターのほうが安心して眠れる」と、地球の木からのトタン板支援に感謝した。住み心地については、「夏は暑く、冬は風が通り抜け、暖房も無いので寒い。このため、ビニールシートで防ぎ、屋根にはトウモロコシの葉を敷いているが、それでも寒い」と。再建については今後の見通しはつかないと顔を曇らせた。また、聞き取りをしていて、被災者の防災意識の啓発はどうなっているのか気になつた。

みんなで造った ラーニングセンター

大地震で校舎に被害を受けた2つの小学校に新校舎がようやく完成した。ラーニングセンターとは2教室の校舎のこと。初めは仮設の予定だったが、コンクリートブロックを使用した丈夫な建物に仕上がつた。(このプログラムは、かながわ国際交流財団の助成を受けています)

ブメスタン小学校は地の利がたいへん悪い。私たちが到着すると、幼稚園から小学校5年生まで62人と先生5人が花の首飾りを作つて歓迎してくれた。着工が雨季に入り、トラックが学校まで入れなかつたため完成が

大幅に遅れた。雨季は農繁期であり、村人は忙しい。仕事の合間、雨の合間を縫つて砂、砂利、ブロック、鉄骨などを運んだという。また、セメントを作るための水も地域の人たちが交代で運んだとの苦労話を聞いた。

チャトレビパル小学校では、地域の人たち214人を2つのグループに分け、1日ずつ整地や基礎づくりに参加してもらったそうだ。復興支援の大工トレーニングに参加した職人が建設に関わった。「安心して子どもたちを学校に送ることができます」「新しい校舎は地域の人たちの誇りです」などの声が聞かれた。どちらも教師サポートをしてきた学校で、さらに強い絆ができた。

(ネパールチーム 丸谷 土都子、野崎 俊一)



熱心に状況調査の結果を聞く

ネパール点描

ここでもスマホが…

マンガルタール高校の奨学生17人を対象にした携帯電話やスマホの費用について聞き取り調査をした。それによると携帯は全員が所持し、スマホは4人。

利便性については「携帯組はニュースを知ることが出来、エンターテインメントが楽しめる」とし、1ヶ月の通話料金は50ルピーから300ルピー(ミルクティー1杯が25ルピーほど)。またスマホ組は「辞典代わりに

なるほか、Facebookも利用している」とか。使用をめぐっての悪い点として、「いたずらや間違い電話がかかる」「時間が無駄」と答えてくれた。コミュニケーションにはメールではなくメッセージアプリ、ニュースもアプリで見るのが普通。また、LINEの機能のある電話やチャットには通信費がかからないなど、時代を反映したモバイルシフトが進んでいる。

こんな光景も…



メールに夢中？ こういう光景はあちこちで見られた

カトマンズ市内の世界遺産などの観光地やトレッキング街道沿いにあるドライブインなどで、幾度となく目にしたのが、観光客や市民を相手にした物乞いの人たち。身体の不自由な人や乳飲み子を抱えた若い母親、かと思えば家族連れもいた。いずれも素足にボロ服を身に纏い、路上に置いた空き缶を前に座つていて人々の喜捨を待つてたが、中には人通りの多い交差点で「1\$プリーズ」と纏わりつく男児もいた。敗戦後の日本でもあった光景に、なんだか心に重いものを背負わされた気分になった。

(野崎 俊一)



カンボジア現地訪問

10月15~19日

幼い少女たちの被害をなくすために…

プノンペンにあるCWCC(カンボジア女性緊急救済センター)の保護シェルターを訪れました。エリアマネージャーのThiraさんの説明によると、今は、25名の被害者たちがこのシェルターで生活をしているとのこと。前回(2016年1月)から大きく変わったこととして、あるメインドナーが支援規模を縮小し、支援対象を18歳以下でレイプや人身売買の被害者に限定したことと、入所者のほとんどが少女たちになっています。CWCCで取り扱っている保護ケースの約7割は家庭内暴力の被害者、あと2割はレイプの被害者、残りの1割が人身売買の被害者たちです。一番数が多く、助けを必要としている家庭内暴力の被害者への支援が難しくなっているのは、とても残念だとThiraさんは話していました。



服を渡した堀理事と子どもたち

は話していました。

今回、地球の木は、入所者の食費や職業トレーニングの費用、新しい生活を始めるための資金として支援金を渡しました。そして会員から集めた子ども服の寄贈もしました。子どもたちの部屋を訪れ、担当の先生に子どもの服を手渡しましたが、ふと疑問に思い「この子たちは被害者の子どもたちですか?」と尋ねると「いえ、被害者です」という答え。どうみても、幼稚園から小学校の低学年にしか見えないので、もう一度尋ねると、「貧困のため、栄養不足で年齢より幼く見えるけれど、確かにこのあどけない子どもたちも被害者だ」というのです。そして、シェルター内を見学していると、前回も見かけた少女たちがいることに気が付きました。通常は、法的に対処すると決意した被害者が6~9ヵ月間をシェルターで過ごし、心身の傷を癒し、カウンセリングを受け、識字や職業の訓練を受けながら、今後の身の振り方をCWCCスタッフと相談して、シェルターを出ていくことになっていました。しかし、子どものレイプの場合、大半は親せきや近所の人など顔見知りの犯行ということで、貧困家庭であったり、子どもの親と加害者の力関係もあって、母親がその被害を食い止められないため、家に帰すことができず、長く保護シェルターにいるのだということです。笑顔がかわいらしい少女たちですが、そのトラウマは深刻です。このような幼い少女たちの被害をなくすためには、少女たちを保護するだけではなく、地域自治体、地方の女性局や警察、コミュニティの人たちなど、地域ベースで、複数のセクターが連携し対応していくことがとても有効だということです。もちろん、人々の意識改革をうながす啓発活動も重要であるということでした。社会全体に人身売買やレイプなどは絶対に許されることではないという意識が広がって初めて、幼い少女たちを含めた女性たちの被害が減るのだと改めて思いました。

(カンボジアチーム 筒井由紀子)

私は「地球の木」の準備会からの会員。設立時、日本はバブルに踊り、経済優先、大量生産消費社会、南北問題の拡大が深刻化していました。景気好調の陰で大切な心のありようが変わるように社会の流れに違和感を持って過ごしていた生活クラブ生協組合員も多かったのでしょう。

地球の木準備会主催で「エビ」についての学習会が行われました。日常何気なく食べているエビについて、生産地である東南アジアの自然環境破壊、薬まみれの養殖実態、不公平な取引などなど、問題点、課題が示されました。自分たちの食や暮らしが地球環境や人権問題

まで関係しているという事実、そのことを知り、共に課題に立ち向かって行動するために「地球の木」を育てていこうと思ったのでした。

現在も残念ながら格差と分断が世界を不安に追いやっています。私は、昨年末たまたま、障がいを持ったお子さんが作成したオブジェを買いました。それには「love grows like a tree」と書かれています。まさにそのとおり!と思いませんか。

今度、平塚デポーの展示会で販売ボランティアに参加します。楽しみにしています。

(平塚市 大島朝香)



TreeSeedも 気仙沼の笑顔に貢献したい

現在、気仙沼市では、仮設住宅から復興住宅へ人々の転居が進み、集団移転地の造成もなされてきています。震災前の日常とはいえないまでも、期限の分からない仮設での不安な生活から解放された人たちが安心して生活ができるようになってきました。

しかし未だに仮設に残された人々は、買い物に不便を感じ、行き場のない人たちもあります。TreeSeedでは引き続き、小型トラックでの移動販売、と同時に安否確認、またお茶飲み会を開き、支えています。

また復興住宅に移っても、知り合いが無く心細い思いをしている人たちの為にもお茶飲み会は必要と感じています。

防潮堤の建設や、被災地のかさ上げなど工事は続いており、いつ終わるか想像できない状況です。ただ、道路が変わり、盛土が増えているのを発見すると、確実に進んでいるのが実感でき、完全に復興した街並みを想像するのは楽しみであります。

最近では、仮設商店街の撤去が進み、新しい店舗を構える店も増えてきましたが、資金面で再建が難し

く、閉店する店もあり少し寂しくも思います。

まだ震災の傷跡は残っていますが、昨日なかったものが新しくでき、日々復興し、希望の光が見えるようになってきました。我々TreeSeedも気仙沼市の笑顔に少しでも貢献できるようこれからも頑張っていきますので、応援よろしくお願いいたします。

(TreeSeed代表 小野寺 大志)



無人になった仮設住宅(2017年2月撮影)

食べてしゃべってアジアを知ろう ～地球の木ラオス・ネパール合同報告会～

2月11日、地球の木関内事務所近くの横浜技能文

化会館で「食べてしゃべってアジアを知ろう～地球の木ラオス・ネパール合同報告会～」が開催されました。「調査報告会」では硬すぎて集客が難しいのでは…」「垣根を低くして、色々な人に参加してほしいね」など話し合いを重ね、タイトルも楽しげに、クイズや「しゃべりば」を設けたイベントを企画しました。

第1部のネパール編では、丸谷理事長からのプログラム進捗状況や2015年にネパールを襲った大地震の復興支援の報告に続き、今回初めてネパール調査に参加した野崎理事から新鮮な発見や驚きに満ちた体験の報告がありました。第2部のラオス編では、採集用や魚とりの籠類、松明、木製カウベルなど、ラオスの森の民が普段使っている生活品に参加者たちは興味津々。「貧しくても飢える人はいない」といわれてきたラオスが今、外資によるゴムのプランテーションや鉱山開発で森を奪われてあり、この収奪から森の民を守ろうとするJVCの活動が紹介されました。

テーブルに並べられた、珍しいスナック類、ラオスのココナツゼリー、ネパールのジャガイモ・カジヤ、ケーキなど手作りお菓子に参加者から歓声が上がり、ラオスコーヒー、ネパール・チア(ミルク紅茶)で舌も滑らかになった参加者たちからたくさんの質問が出て、楽しいひと時を過ごしました。 ネパールチーム 乳井 京子

活動日誌 (12月～2月)

12月

- 1~2日 デポー展示会 (のぼりと)
- 2~14日 ネパール訪問 (丸谷・野崎)
- 13~19日 ラオス訪問 (成瀬・中野)

1月

- 16日 第6回理事会

2月

- 5日 よこはま国際フォーラム2017 (JICA横浜)
ラオスワークショップ
「森を守る・くらしを守る」

- 11日 食べてしゃべってアジアを知ろう
～地球の木ラオス・ネパール合同報告会～
(横浜市中区)

- 16日 第7回理事会

- 17~19日 南北コリアと日本のともだち展 (千代田区)

- 26日 ちがさきサポセン☆ワイワイまつり (茅ヶ崎)
- 27日 デポー展示会 (緑園)

第18回地球の木総会のお知らせ

日時:5月28日(日)13:30~16:30

場所:かながわ労働プラザ4F 第5・6会議室

※詳細は同封の「第18回地球の木総会のお知らせ」をご覧ください。



幸せ分かち合い年末募金 ご協力いただきありがとうございました

今年も会員の皆さまをはじめ、95名を超える方からご協力をいただきました。皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

年末募金総額: 572,720円

<寄付先別内訳>	
・ネパール 幸せ分かち合いムーブメント	63,000円
・ラオス 森林と農業プログラム	60,000円
・カンボジア DV/レイプ被害者支援	54,000円
・東日本大震災気仙沼支援	42,000円
・多文化共生	5,000円
・無指定	348,720円

※2016年にいただいた寄付の領収証を

2017年1月23日に発送いたしました。ご不明な点がございましたら、地球の木事務局までご連絡ください。

地球の木カレンダー2017 ご協力いただきありがとうございました

今年は644部ご購入いただきました。カレンダーの収益は、ネパール・ラオス・カンボジアの支援に使われます。皆さまのご協力に心より御礼申し上げます。

イベント情報

災害をきっかけにした 人づくりの国際支援

- 日時:3月11日(土)13:00~16:00
- 場所:かながわ県民センター3F 301会議室
横浜駅から徒歩約5分

丸谷理事長がパネリストとして、ネパール大地震被災者支援の事例を紹介します。



- ◆ 今号からコラム「地球の木で活動する」を「地球の木と私」にしました。大勢の会員が気軽に楽しく語れる場になることを願って。(K.S)
- ◆ 新しく住宅が建ち、見た目には復興しつつある気仙沼。自らの生活もある中で、新しい環境に慣れるよう、人々を支えているTreeSeedのメンバーに暖かな春よ、早く。(M.H)

あーすフェスタかながわ2017

- 日時:5月20日(土)、21日(日)
10:00~16:00
- 場所:神奈川県立地球市民かながわプラザ
(あーすプラザ)
JR根岸線
「本郷台駅」徒歩3分



多文化共生社会の実現に向けて互いを理解する機会をつくるため毎年開催されています。今年で18回目を迎えます。世界の民族品、

フェアトレード・グッズなどの販売、各国の料理を提供する世界屋台村が催されます。



特定非営利活動法人
地球の木